

<発行>
鹿児島市立
武中学校
鹿児島市武 3-42-1

父の失業

校長 前田 浩二

心の中にしまい込み、封印していた光景が、ふとした拍子に頭をもたげてくることがあります。私は中学二年生の時、失業という父にとって耐え難い体験を目の当たりにしました。

当時、私たち家族は北九州市八幡に住み、父は大型機械を工場に据え付ける仕上げ工という職人でした。高度経済成長のおかげもあり、父は勤めていた会社から独立し、下請け会社をつくらせていました。会社といっても従業員七、八人の小さな小さな会社です。それほど収入があったわけではありませんでした。私が中学生になった頃には八幡の主力産業である鉄鋼業が振るわなくなり、地元での仕事が減ったため、県外への出張業務が多くなりました。

それは従業員の方々にはとても負担を強いるものでした。そして、北九州工業地帯の衰退とともに、いよいよ県外の仕事ばかりになった頃、父は会社をたたむことを決意しました。

それは、父にとって苦渋の選択であったに違いありません。母にそのことを告げた後、父は大声を上げて畳の上

に泣き崩れました。高と野球のピッチャーとして鳴らし、腕っぷしが強く、私にとつてとつともなく頼もしかった父が、声を上げて泣く姿を初めて見ました。母と私も涙が止まりませんでした。そして、ひとしきり家族で悲しみを分かち合ったあと、いつしか私は父に励ましの言葉をかけていました。強かった父を励ますなど、これも生まれて初めての経験でした。

父は会社をたたんだあと、長年の無理がたたって傷めていた身体を治すため一年間自宅療養をすることになりました。仕事ばかりしていた父がずっと家にいるのは何か不安な面もありましたが、ゆっくり話ができるようになったのはうれしいことでした。

充電期間を終えた父は知り合いの会社で準社員という形で再び仕事をする事になりました。今思い返せば、経済的には苦しかったのですが、あの一件以来家族の絆は深まり、何より失業から立ち直った父の身体的な強さだけではない人間的な強さを知ることができました。

父は今九十歳、私もあの頃の父の年齢をはるかに超えました。会社の倒産や子どもの貧困問題のニュースに接するとあの頃の光景と重なり心が痛みます。自分自身の経験を忘れず、生徒一人一人が抱えているものを感じ取れる学校でありたいと思っています。

部活動主将会

毎月一度各部の主将・部長が集合して、現状活動を報告したり、安全点検の実施状況を報告したりします。二年生が中心となり半年が経ち、主将らしい発言も多くなり頼もしく思います。一月は、「下校時刻を守る」を議題として話し合いました。ルー



職業講話

一月十三日に二年生を対象に、職業講話を行いました。タレントの野口たくお氏、運輸技師の五代拓朗氏、プログラマー池田武尚氏の三人の講師が、仕事の大切さについて様々な角度から話をしてくださいました。



<二年生代表感想>

仕事について深く考えたことがなく、「難しいから大人になってから考えれば良い」とあまり関心をもっていませんでした。しかし、話を聞いて仕事は難しさばかりではなく達成感や面白さ、やりがいを感じる事ができるということを学びました。

野口さんは言葉だけで人を楽しませる話題の中に「生きる上で大切なこと」や「生き方のヒント」をいれて教えてくださいました。心に残ったことは、「笑うことは万能薬」です。これまでたくさんの方の努力と苦労があった方の言葉だからこそとても心に響きました。

五代さんの話では、日々安全運転することの責任感と危機感の中で当たり前のように目的地に着くことのありがたさを感じました。運転手は「人の命を預かる」という重大な仕事ですが、生き生きと仕事について語ってくれた姿に感動しました。

池田さんの話では、様々な困難があったにも関わらずその度に立ち上がり挑戦し続けたことに感動しました。また、「体験と失敗を怖がりすぎない。」と話をされ、私もたくさんのことに挑戦していこうと思いました。

仕事は、免許や資格が必要な職種もあることを知り、今からの勉強の仕方も考えていきたいと思いました。

